

NEW CROWN 授業実践事例

BOOK 2 LESSON 3 授業例②

M.M. 先生

指導計画表

(全8時間)

時間	学習内容・主な活動
1	<ul style="list-style-type: none"> ■とびら ・プレ活動 ■GET(Part 1) ・文法の導入 ・語句・表現の導入 ・コミュニケーション活動 ■USE Listen 2-(2)
2	<ul style="list-style-type: none"> ■GET(Part1) ・本文の導入・理解 ・Practice1 のメモをもとにライティング
3	<ul style="list-style-type: none"> ■USE Listen 1・2-(1) ■GET(Part 2) ・文法の導入 ・語句・表現の導入 ・本文の導入・理解
4	<ul style="list-style-type: none"> ■GET(Part 2) ・本文の復習 ・コミュニケーション活動 ・活動をもとにライティング
5	<ul style="list-style-type: none"> ■GET(Part 3) ・文法の導入 ・語句・表現の導入 ・本文の導入・理解
6	<ul style="list-style-type: none"> ■GET(Part 3) ・本文の復習 ・ナシードの予定を書く ・Practice 2 をもとにライティング

時間	学習内容・主な活動
7	<ul style="list-style-type: none"> ■USE Read ・文法の導入 ・語句・表現の導入 ・本文の導入・理解 ・Topic と Thesis を確認
8	<ul style="list-style-type: none"> ■USE Speak 1 ・夏休みの予定を書く ・1st Draft をペアでシェア ・2nd Draft へ ・グループ内で発表 ・全体で発表

実践例

1. はじめに

平成24年4月から実施された新学習指導要領の下では、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の4技能の総合的な指導を通して、これら4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成するとともに、4技能をバランスよく指導することが求められている。特に、「書くこと」では、目標に『英語で書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする』とあり、内容では、『自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと』とある。このことから、一文一文を正しく書くだけでなく、まとまりのある文章を書くことが求められていることがわかる。

また、公立高等学校入試問題で自由英作文や条件英作文を含めて自分の考えを書かせる問題を出題する都道府県は年々増加傾向にある。このことから、日ごろから授業の中で書く活動を取り入れ、生徒に考えさせる場面を設定する必要がある。そこで、今回の実践事例は「書くこと」を意識した内容となっている。

2. 授業について

①Lesson 3での単元ゴールを考える

本課では、自分や友達の予定について話すことが最終的な単元目標となっているため、そのゴールに到達するためにGETの中でライティング活動を取り入れ、Lesson 3のゴールを「夏休みの予定を立てよう」に設定した。生徒たちはこのゴールに向けて、各GETで行うライティング活動を積み重ね、最終的に自己表現活動として、各自の夏休みの計画を発表することになる。生徒に与えた課題は、自分の夏休みの予定を5文以上の英文で表現する。というものである。また、全員に対してグループ内での発表を予告しており、そのグループの中で一番しっかりと書いていた生徒については、全体の場で発表することも併せて予告した。

②GETでの指導事例

とびらのブレ活動では、写真をもとに生徒とイメージを共有する。「何が見えるか?」「そこから何をイメージするか?」英語でのインタラクションになるため、単語での解答もOKとし、英語では難しい表現であれば日本語もOKとした。とびらの段階で環境につながる単語が出れば、後のLESSONとのつながりが生まれてくる。

Part1では、未来表現のwillを扱うことになる。そこで、今日の天気から生徒に質問する。How is the weather today? It's ~. 生徒からはこのように返ってくるのが予想される。そこで、How about tomorrow?と聞いてみる。天気を表す単語を1年次からやっておけばある程度の単語は導き出せるため、明日=未来の表現ではどのような英語で表現するのか理解しやすくなる。そこから、週間天気予報を使って、1週間の予報をPractice 2のようなかたちを用いペアで話し、話したことをもとにワークシートに「自分のこと」「友達のこと」を英語で書いてみる。次に、同じ天気がTopicであるUSEのListenを用いて天気と気温を確認し、キャスターになったつもりでレポートする。本時その2では、本文中心に取扱い、Practice 1のリスニング活動を行う。その後、完成したメモをもとにリサとボブの予定を実際に英語で書く。

Part2では、未来表現のbe going to ~を扱うことになる。Part1で用いたwillの未来表現とどこが違うのかを説明し、「前もって決まっている予定を表す」ことを意識させておく。まず、本文中心に扱い、生徒に久美とポールの対話文の内容を理解させ音読暗唱に取り組みさせる。実際に会話してみても、2人のやり取りの内容に付け加えたら、より自然な会話にならないか考え、内容を書き加える。生徒からの反応としては、剣道の昇段試験に向かう久美に対して、Do your best!やNever give up!など、応援するコメントを入れる生徒が多かった。また、久美の台詞にI want a time because I'm going to take a kendo test.と付け足した生徒もいた。さら

に、Thanks. や It's nothing. に対する言い換えの表現を使った生徒も見られ、自分なりに教科書をアレンジすることに喜んで取り組んでいた。本時その2では、USE Listen のリスニング活動からスタートし、天気ニュースでは特に注意して聞き取り、流れた内容について質問した。その後 Practice 1 のリスニングを行い、本文内容の復習のために内容に関する質問を生徒に作らせ、答えさせた。次に、まとめの活動として、「夏休みの計画を立てよう！」(資料1) のコミュニケーション活動を行った。ALT とのチームティーチングでこの夏にどこに行く予定かを JTE とのやり取りの中で理解させ、未来表現の確認を行った。

A : Becky, where are you going to go during the summer vacation?
 B : I'm going to go to Australia.
 A : Oh, really?
 What are you going to do in Australia?
 B : I'm going to hug a koala there.
 A : I see. Sounds good.

生徒は、各国やその国で行う内容の発音、意味を確認するためにパワーポイントのスライドを使用しALT の後について何度も音読し、活動に入った。4つの国の中から自分が夏休みに行きたい国を選び、そこにある3つのすることの中から自分がしたいと思う内容を選択させ、STEP3 の表にチェックを入れる。

氏名	国名	目的
自分	A C F E	1 2 3
	A C F E	1 2 3

※A, C, F, E は国名の頭文字

生徒たちは、最初に ALT と JTE が行った会話例を参考に自分のことについてペアで話す。会話例は黒板に貼ってあり、下線を変えることによって自己表現ができる形になっている。その後クラス全体の生徒にインタビューをしてみわり、自分の表が埋まれば着席する。その際、手を後ろで組むなどしてできる限りワークシートを持ち歩かず、生徒同士がアイコンタクトを大切に、コミュニケーションでき

るようにあらかじめ指示しておく。そのため、ワークシートの表を簡略化してあり、覚えることが少ないよう配慮した。クラスサイズを考え、時間制限を設けて活動に移ってもよい。全員が着席した段階で、誰がどの生徒に質問したのか確認し、そのインタビューの結果を発表させる。

(例) Sota is going to go to America. He is going to enjoy the Disney World.

何人が指名したり、生徒同士で指名しあったりし、その後 STEP4 のライティング活動に入る。時間的に難しければ、宿題にしてもかまわないが、必ず生徒が書いてきたものに対しては、教員が添削することが大切である。この積み重ねが生徒の書く力を伸ばしていくと信じて根気強く指導を入れる。その際に、文法の誤りや単語の綴りミスなどで年度当初から生徒と共通理解のもと符号などを決めておくと、添削の時間も短くなる。また、全てを直すのではなく、生徒に考えさせるという点でもこの手法は有効であると感じている。

Part 3 では、接続詞 that を用いて自分の考えを述べるが必要とされている。そこで、まずメイリンとナシードの対話文を理解した後に音読暗唱を行った。次に、Practice 1 の Listening を行い、ポプと絵里の将来について、表を参考に英語に直す作業を行った。生徒は質問に出てきた when you finish our school を活用し、when he/she finish his/her school と書き換えることで2年後の状況をうまく表していた。本時その2では、本文の復習を行うために Part 2 と同様に生徒に内容に関する質問を考えさせた。その後、もう一度本文に戻りナシードが国際会議でどんなことを発表するのか、メイリンとの対話文を参考に書き出した。実際に生徒が書いたものが以下のようなものである。

○Nasheed is going to talk about global warming. He thinks that it is an important topic. He hopes Meiling will enjoy his presentation.

これにメイリンの意見として、次のような一文を書き加えた生徒もいた。

○Meiling thinks that we must learn more about global warming.

これらをもとにして、自分たちはどんな環境問題に興味を持っているのか、Word Corner を参考にして

Practice 2 の活動を行った。そして、自分たちが話し合ったことを Practice 3 のようにまとめた。

③USE Read の指導事例

GET(Part 3)の流れを受けて国際会議で環境問題について3名の生徒が発表している。In-Reading や Post-Reading の活動を行いながら、3名の生徒の発表において Topic と Thesis をはっきりと理解させ、自分ならどの生徒の考えに近いのかを意思表示させた。また、この3名の生徒の考えには当てはまらない生徒については、その生徒自身が興味を抱いている環境問題の Topic を挙げさせた。Try ではライティング活動が取り上げられているが、前述したように Lesson 3 のゴールを「夏休みの予定を立てよう」に設定しているため、3名の生徒作品の読み取りに重点を置いた。

④Lesson 3 の単元ゴールにむけて

USE Speak 1 の活動を行い、メモをもとにキャッシーの予定を作成する。グループ内でシェアし、個人で作成した予定に加筆修正を加える。その後全体で確認する。この活動終了後は、この課の最初に生徒に伝えていたゴールに向けて自己表現の英作文を作成することになる。その際、気を付けたことが「読み手を意識する」ことである。1st Draft の段階ではペアで作品を交換し、その作品にペアの相手が良い点やもっと聞きたい点など、読み手としての立場からコメントを書く(英語でコメントできると良い)。そして、生徒は自分の手元に戻ってきた作品に書かれたコメントをもとに、加筆修正を加え、2nd Draft を作成する。そうすることによって、生徒の作品は読み手を意識したものに変わっていく。このような活動を取り入れることによって、生徒は「人に読まれる」ことを考えるようになる。友達が読み手になることで極度に緊張することなく英文を作成し、また Feedback が友達から返ってくることもあり、意欲的に英語を書こうとするようになった。また、友達の誤りから学ぶこともあり、誤りに気づくことで本人の誤りも少なくなってきたように感じる。ただ、やはり生徒同士の確認では理解が浅い場合もあるので、机間指導を行う中で教師の確認が必要となる。また、全体の場での発表でも、はじめ

にグループ内で発表していることもあり、堂々と行うことができた。発表しなかった生徒にとっても、良く書けているクラスメートの作品を聞く機会を与えられることによって刺激を感じることができた。さらに、発表した生徒の原稿を活字にして残しておく、モデルにもなって良いと感じた。先輩の作品を参考にすることで次年度の指導にも生かすことができ、生徒にとっては目標となっている。

3. まとめ

英語で「書くこと」はどの学習段階の生徒にとっても難しいと感じる活動である。どうしてそのような状況に陥ってしまっているのかを改めて考えたとき、日々の実践にまとまりのある文章を書くためのライティング活動が少なかったように思う。各単元の新出文型を書く練習はできていても、ある程度まとまりのある文章を書く練習をしていなければ、書けないのは当然のことである。しかし、「書くこと」は「話すこと」のベースにもつながる大切な活動である。その「書くこと」を軽視した授業デザインは今後成り立たないのではないかと考える。プロジェクト型学習を念頭に置いた年間指導計画のもと、中学校3年間を通した段階的な「書くこと」の指導が必要である。同時に、生徒が意欲的にライティング活動に取り組むように Feedback を効果的に与えることも必要になる。

「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」では、「英語を用いて何ができるようになるか」という観点から目標を具体化し、小中高を通じて一貫した学習到達目標を設定するとある。さらに小学校における外国語活動の教科化も伴い、中学校に求められるものも変わってくるであろう。このような変化が求められている英語教育であるが、目標を実現するための手立てとして Backward Design の発想で指導計画をもう一度見直し、生徒に身に付けさせたい力をはっきりとさせなければならないと感じている。